

基調講演
(2)

ロータリーの原点



講師—————パストガバナー 佐藤千壽氏

講師紹介

略歴 1918年8月東京にて出生
1943年東京大学法学部卒業
現職 千住金属工業株式会社代表取締役会長
千住スプリンクラー株式会社、株式会社産業分析センター各会長
ドイツ法人 SATO EXPORT&IMPORT GMBH
マレーシア法人 SENJU(Malaysia)SDN.BHD.
アメリカ法人 SENJU AMERICA INC.各会長
インド法人 SEN-JAY SOLDERS LTD.最高顧問
財団法人美術工藝振興佐藤基金理事長
学校法人江戸川学園理事長
東京商工会議所名誉議員
日本経営者団体連盟常任理事
日本障害者雇用促進協会副会長
東京都障害者雇用促進協会最高顧問
ロータリー歴 1959年東京東RC入会/「ロータリーの友」
1966~67年地区委員、67~71年専門委員
/1968~69年クラブ会長/1974~75年RI
第358地区ガバナー/1975~76年RI地区
情報研究会カウンセラー(日本六地区担
当)/1977年サンフランシスコ国際大会
に於て国際奉仕部門日本語グループコン
サルタント/1979~80年RI財団諮問グル
ープ委員/1982年ダラス国際大会に於て
国際アイディア交換会議クラブ会長幹事
部会委員長/1974年ミネアポリス、1977
年サンフランシスコ、1980年シカゴ、
1983年モンテカルロ、1986年シカゴ、各
国際ロータリー規定審議会に於て地区代
議員/1986~現在RI文献翻訳諮問委員
(米山特別功労賞、ポールハリスフェロ
ー、RI財団特別功労賞、等)

著書 [古美術関係]
『やきもの歳時記』
『古染付』 (求龍堂)
『清坑華甲抄』
[ロータリー関係]
『ロータリーは人を作る』
『私本・人作りロータリー』上下二巻
[評論]
『職業倫理』
『職業と人生』 (善本社)
『時事論集山色水聲』前後二巻
(河出書房新社)

創立当初のロータリーが、会員同士の親睦と職業上の互惠取引を目的にしていたことは既に皆様御存じだと思います。然し創立一年後には、自分達仲間内だけの商賣をうまくやろう、というに過ぎぬのでは社会的存在意義が無いと覚り、地域社会に対する責任という條項を採り入れました。それから更に二年後の1908年に、チェス・ベリーとアーサー・シェルドンが入会し、ここに初めて今日のロータリーの原型が出来上がったのです。即ち国際ロータリーという組織の骨格を作ったのが、チェス・ベリーであり、その組織に生命を吹き込む精神的骨格を作ったのがアーサー・シェルドンであります。そのシェルドンの提唱したロータリーの精神とは何か——それは1911年の第二回全米ロータリー連合会で発表された彼のメッセージ「経営の科学とは奉仕の科学である—最もよく奉仕するものが、最も多く報われる・He profits most who serves best なのだ」という一語に盡きます。そこで、その精神を体現する組織の骨格は？と問われれば必然的に「奉仕する職業人のクラブ」ということになるわけで、ここからロータリーは数ある他の社交クラブ、親睦団体と明らかに違う独自の道を歩み始めることとなります。

ところで、シェルドンの提唱する「経営の科学」としての奉仕ということは、当然自分の携わる職業・事業に關わることでありますから、結局各個人の倫理観に帰着致します。そしてこの倫理観を、ロータリアンはかくあるべし、という具体的行動規範にまとめあげたのが、1915年に採択された「ロータリー道徳律」であって、これで一層明確にロータリーの志す奉仕とは何であるか、という道筋が示されたわけでありました。

然し一方、クラブの社会的存在意義という点で、そういう個人的な道徳論に頼らぬ人が出て参ります。その点で最も鋭い批判の狼煙を上げたのが、テキサス州ヒューストンの会員メルヴィン・ジョウンス=Melvin Jones=

で、彼は、奉仕の実践とは抽象的観念的な道徳論ではなく、現に今さまざまの面でお金を必要としている人達に対し、金銭的に援助の手を差し伸べることだ、と確信し、1917年、新たにライオンズという奉仕クラブを設立しました。ここに「I serve」という理念のロータリーに対し、明らかに違った道を示して「We serve」と叫ぶ今日のライオンズ・クラブが誕生したのであります。

なお、これに留まらず、この問題はその後ロータリー内部で熾り続け、早くもその翌年、1918年にオハイオ州エリリア・ロータリー・クラブが設立されるや、これぞ絶好の機会とばかりエドガー・アレン=Edgar Allen=という人物が入会してきて、一舉に大論争の火が燃え上がりました。アレンはかねがね身体障害児救済問題に深い関心を持っており、これこそロータリーの様な奉仕団体が取り組むべき緊急の課題だとして積極的に各クラブに働きかけ、1922年のロスアンゼルス国際大会で決議案を採択させることにも成功しました。ところが、これが却って火に油を注ぐような結果となって、ロータリーの基本理念を守ろうとする人達との大論争になり、ロータリーもあわや空中分解するかと危ぶまれる程の騒動になったのです。そして、もうどうにも收拾つかぬ様な状態にまで追込まれた時に出てきたのが、翌1923年のセント・ルイス大会で採択された、あの歴史に残る名宣言「決議23-34」なのであります。(拙著『私本・人作りロータリー』—「決議23-34成立の経緯」参照)

「セント・ルイス宣言」という別称まであるこの名決議の真髓は、今更改めて言うまでもありませんが、「根本問題として、ロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起こる争を和解させようとする人生の哲学である」という一節に凝縮されている、と言っているでしょう。従ってこの決議は、その劈頭第一番に、「ロ

ータリーに於て社会奉仕とは、ロータリアンすべてがその個人生活、職業生活、及び社会生活に奉仕の理想を適用することを鼓吹かつ育成するにある」と謳い上げ、そしてまた「ロータリー・クラブの社会奉仕活動は、ロータリー・クラブの会員を、奉仕という点で訓練しようとする実験としてのみ考慮せらるべきである」と釘をさしているのであります。

ここから明瞭に読み取れるのは、ロータリーの奉仕とは、会員一人一人、各個人の問題である。会員一人一人を奉仕献身の、より良い人間に育てあげるのがクラブの責務であって、ロータリーが提唱する様々なプロジェクトは皆その為の実験手段に過ぎない、という基本精神です。即ちロータリーの精神的骨格が、アーサー・シェルドン入会后15年の波瀾試練を経て、ここにしっかり固まった、と言っているでしょう。

ロータリーの議論でも「原点に還れ」という言葉が繰返し使われますが、然らばその原点とは何か、となるとどうも曖昧になってしまいます。然し私をして言わしめれば、ロータリーの原点は正にこの精神的骨格が完成した1923年にあるのです。「決議23-34」はロータリアンたる者反覆誦和すべき聖典でありましょう。

こういうわけで、少くも尔来半世紀、私がガバナーに就任する頃までのロータリーは最も優れた人生教室として尊敬と羨望の眼で見られていました。私がガバナーを勤めた1974~75年度の国際ロータリー会長は、つい先頃、4月23日に87歳で亡くなられた William Robbins ですが、彼は、「ロータリーは成人教育の最もすぐれた実験場だ」と言い、「より良き世界への第一歩はより良きあなたであり、より良き私である」と国際協議会の壇上から私達に語りかけてきました。そして「ロータリーの第一の目的は人を作ることであります。ロータリー・クラブの価値は、そのクラブが如何なる人を作ったかによって計られる」、と全世

基調講演

基調講演

基調講演 (2)

界から集まったガバナー・ノミネーを鼓舞激励したのであります。

然し、僻目かも知れませんが、ロータリーもこのあたりが頂点で、国際ロータリーという中央本部自体が直接多くの奉仕プロジェクトを手懸ける様になり、またそれに伴う財政事情から拡大会員増強が重点課題になって来るに従って、ロータリーも急速に変質してきました。また不思議な因縁と申しましょうか、それまで25年間続いたレーク・プラシッドという鄙びた静かな環境での国際協議会も、私共の時が最後になりました。「居は氣を移す」という『孟子』の言葉もまたこれで実証された様です。

こうして今やロータリーの活動も限りなくライオンズに近付き、公然とライオンズとの協同プロジェクトまで語られる様になったのです。そうなれば当然「人作り」などという使命は第二義、第三義の問題として軽視され、要は如何にして「We serve」の輪を拡げるかで、その為の拡大と財政基盤確立こそ重点目標となってきます。これはもう是非の論を超越した時の勢とでも申すほか無いでしょう。



さてここで、一寸話題を変え、皆様にご考慮頂く教材として、日本人に一番親しみのある佛教という国際的宗教教団のことをお話致しましょう――

釋尊が亡くなられたのは紀元前383年頃とされていますが、その後も残された弟子達によって佛教教団はどんどん膨張してインド各地に拡がってゆきます。そういう過程で教典や戒律の整備も進んでゆくのですが、佛教者として修行上固く守るべき規範としての戒律については屢々議論の種になりました。なお戒とは、在家出家を問わず佛教者としての基本的な心構え、即ち日常生活姿勢に関する規範で極めて道徳的な戒めですから、建前として、少くも不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒ぐらいは厭だと言えないでしょう。然し律の方は出家者の為の細かな規定で、教団の運営規則まで含んでいますから、その解釋、運用をめぐって対立が生じます。これが佛教界に各分派が出来るもとで、早くも佛滅後百年程経った頃、東インドのヴァイシャーリーで律をめぐると大論争がありました。然もその発火点になったのが、信者から金や塩を集めてこれを分配し蓄えるという様な反律行為を、ヴァイシャーリーの僧侶達がやっていた、という事件なのですから、これは意味深長、興味深いことです。そこで律檢証の為、東西インド各地から代表者が急遽招集されて大集會が催されました。結集と称しますが七百人の比丘が參集したので七百結集とも呼ばれます。結集とは釋尊の没後古代インドで弟子達が集まって、それぞれの記憶にある釋尊の教説や戒律を合唱し整理した学界の様なもので、このヴァイシャーリーの結集は二回目なので、正式には第二結集と記録されています。ところが、この席での論争が、遂に教団分裂という事態にまで到った為、第二結集は佛教史上の劃期的大集會となりました。

私はこの道の専門家ではありませんから、学問的、哲学的に体系立て、対立する双方

の論点を説明出来ませんし、また皆様にとってそれ程興味もないと存じます。要するに、素人耳に一番解り易く説明すれば、一方はあくまでも教祖釋尊の教えと、その当時定められ戒律を厳しく守り、徹底的に修行を積んで悟りの境地に到る――これが僧侶として本来あるべき姿だ、という主張であり、他方は、そんな自分一個の人間完成を目指すのではなく、広く大衆に教えを広め苦惱する衆生を救い上げるのが宗教人の使命で、その為には時と所によって戒律も変って行く。時代と共に手法を変えてゆかなければ教団の維持も出来なくなる。あなた方の主張は自分の悟りで満足している小さな乗物みたいなものだ。然し我々の考えは、広く大衆と共に進もうという大きな乗物なのだ……ということです。

大乘佛教・小乘佛教という相対する二つの呼称はここから生まれたのですが、小乗という言葉は、佛教界に新しく登場した後進の比丘達から守旧派の長老達に投げ掛けられた蔑称だったのです。従ってそういう差別用語を使わずに分類すれば、長老派は上座部、新興の革新派は大衆部と呼ぶべきでしょう。ともかくここで佛教教団は二部に分裂し、その後各部内で分派を生みながらも根本二部のうち、上座部は南進して今日スリランカ、ビルマ、タイ等に普及している南方佛教となり、大衆部は北進して中央アジアから中国、朝鮮、日本へと伝わった北方佛教として榮えて来ました。従って北方佛教は殆ど皆大乘派なのです。

然し「大衆を等しく救い上げて進む大きな乗物」と誇称した大衆部は、その柔軟な姿勢によって教団を拡張して行きますが、その反面、次第に俗化して墮落してきたことも事実です。僧侶は自分自身が厳しく戒律を守り、人格を磨き、法を説くことによって大衆を教化すべきなのに、今や日本では大部分が単なる葬式佛教になってしまいました。

先程、佛教教団分裂の発火点になったのが、蓄財に勵んだヴァイシャーリーの僧侶だった

ということをお話しましたが、大衆部にはその発端からして既に財宝誘惑の萌芽があったのです。勿論、坊さんとて霞を食って生きてゆけるものではありませんから、当然財政問題にも関心を持って然るべきでしょう。然し本来の使命が何であるかを忘れ、組織の膨張拡大に狂奔して人作りを疎かにすれば、やがてその組織自体が内部から崩壊します。大衆と共に、などという美辞麗句には、そういう危険な落とし穴があるのです。

ともあれ現代日本の佛教界には、学識、人格、識見すぐれた高僧も居られますけれど、それは宗派としては大乘派に属しているものの、生活姿勢の面から見れば長老派上座部に等しい、と言っても良い小數派です。一方、小乗と批難された南方佛教の僧侶には、持戒厳しく禁欲精進の姿勢を貫いている者が多く、広く民衆の尊崇敬慕を受けて居ります。どちらが本当に衆生濟度の実績を示しているか、改めて考え直す必要がありそうです。

汝が求める光は汝自身から……汝自身を輝かせ……求道の人は何よりも先ず自分自身が涅槃に到る道を求めよ……そうすれば、その人自身から発する光が千里の道を照らし、衆生を濟度することが出来るのです。そういう精神的な自利の道はそのまま結果的には利他の道に繋がるのです。ところが一方、大乘という名目的な金看板に安住して、自分自身の魂を洗うことを忘れ、たゞ物質的な自利を求めているのが日本佛教界の現状ではないでしょうか。醜い権力争い、派閥争動、脱税問題等枚擧に違ありません。いかがわしい新興宗教が隆盛を極めて社会問題化するのも、また道徳の頹廢、青少年非行の増加にも既成宗教の怠慢・墮落に一斑の責任があります。

「権力は墮落する」という格言がありますが、組織も膨張拡大して権力化すれば間違無く墮落します。大乘＝大衆部はその甘美な理想のもとに、広く世界宗教として発展拡大し、一方、小乗＝上座部は宗教者としての原点に

基調講演

(2)

固執するあまり、南アジアの限られた地域にしか根付きませんでした。然し現時点で、果して何れが民衆にとって心の糧になっているのでしょうか。社会の安寧幸福という観点から考えて何れが本当に価値がある存在なのか、改めて問い直してみる必要があるでしょう。

企業の世界に於てさえ同じことが言える時代になりました。商品の規格とか、取引の規準とか、そういうものは世界中何処でも通用するものでなければなりません、企業自体の規模が国際的な大組織である必要はなくなります。各地方に根を下ろして独自の商品を創出する中小企業が、必ずしも国際的大企業より劣っているとは言えないでしょう。どちらが市民生活を豊かにし、人々に仕合わせをもたらすか、今やそれが問われているのです。企業でさえそうだとしたら、まして世界宗教が民族宗教より上位にあるなどとは言えなくなります。

さて長々と佛教教団の二つの流れについて駄弁を弄しましたが、この佛教界に於ける大乘・小乗の図式を下敷にしてロータリーを考えてみてはいかがでしょうか。佛教の歴史は二千四百年、ロータリーは近々百年足らずでとても比較になりませんが、それでも佛滅後凡そ百年程経った頃から教団内に大きな対立が生じ、そこから大乘・小乗という二つの部派が出来たという点は、ロータリーに於ても大いに考えさせられるものがあります。また大乘佛教が中国に於ても日本に於ても、幾多のすばらしい大宗教人を輩出し、その高邁な思想と強烈な吸引力によって世界宗教と誇るに足る大教団を築き上げてきたものの、やがてその先達の権威を笠に着て俗化墮落の一途を辿ってきた、というこの史実も、百数十万の会員を擁する世界的な大奉仕団と自負する国際ロータリーの現状と重ね合わせてみれば、何か他人事無らぬ気がするではありませんか。

あるいは牽強附会の独断かも知れませんが

敢えて言わせて貰えば、ロータリーの精神的骨格を作ったアーサー・シェルドンは上座部長老派の筆頭であり、ライオンズを創立したメルヴィン・ジョーンズは大衆部大乘の先駆者でありましょう。従ってライオンズから見れば1915年の「ロータリー道徳律」の如きは長老派の信奉する小乗律だということになります。「決議23-34」は大乘と小乗の折衷論ですが、根底にある精神的骨格はあくまでもロータリアン個人に重きを置いた上座部思想であります。

そもそも古代佛教教団の結集は、ロータリーで言えば規定審議会としての役割を持っており、ここで大衆化路線と長老純潔保守派との対立が生じて、大乘・小乗の二部に分裂したことは先程申し述べた通りです。そして時と共に大乘の勢力が強くなってゆくのですが、ロータリーでも同様で、より多くの会員を、という大衆化路線で年毎に規則は緩やかになります。クラブの地域制限・職業分類・出席規定・年間例会数……次々大衆部の勝利です。

然しそれでも、職業奉仕こそロータリー存立の基盤だとする信念に揺るぎ無い限りは、まだここに上座部の哲学が立派に生きている、と言っていいでしょう。何故なら職業奉仕とは、会員一人一人が自分の職業の倫理的水準を高めることによって社会に貢献せよ、ということであって、帰する所会員個人の人格陶冶、自己錬成に外無らぬからです。

こういうわけですから、私共の信奉するロータリーは成人教育の場であり、人作りを使命とする人生学校でした。ところが組織の拡大と奉仕プロジェクトの多様化に伴って、自分の職場などという小さな舟より、世界の海を航海する大きな舟の方が大事なのだ、という思想に変わってきました。その大義名分はまことに立派なもので極めて大衆受けするものですが、そこには先程申し述べた大乘佛教の俗化低落、倫理の崩壊、と軌を一にする危険因子が潜んでおります。

第一の危険は職業倫理の崩壊・第二の危険は自己顕示欲・第三の危険は金銭感覚の麻痺汚染・です。これはもう三つ共、単なる危惧杞憂ではありません—今やこうした罪業が我々の身近に続発しているではありませんか。嫌われるのを承知で敢えて具体的に申し上げます—

第一 — 連日新聞で報道されるあの金融証券の不祥事は一体何ですか。いや更に遡って八十年代の泡沫景気を演出したあの企業行動を、職業倫理に照らしてどうお考えですか。然もこういう反倫理的企業の首脳部は、殆ど皆ロータリーの会員なのです。

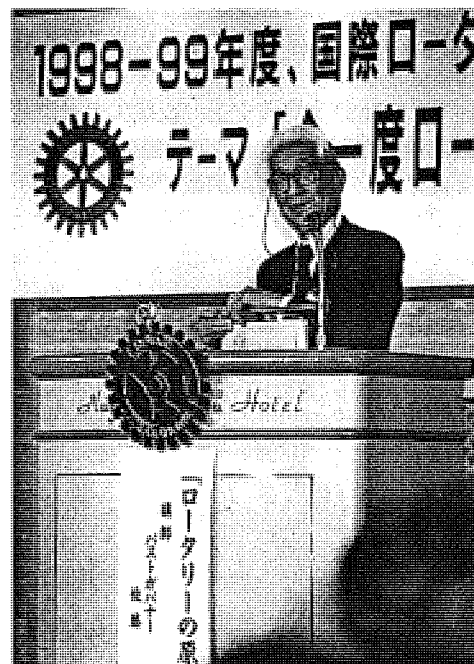
世界中のポリオを撲滅するとか、地球上に飢餓と貧困を無くするとか、壮大な企画をぶち上げて職業奉仕をないがしろにした結果がこれです。

第二 — 人間は誰でも多かれ少なかれ、名譽欲・自己顕示欲を持って居ります。それは生きる証ですから、その限りに於て悪いことではありません。然し神明に誓って愧じぬ本

当の名譽とは何なのか…それを見誤ると大変なことになります。名譽ある生き方とは富でもなければ勲章でもない……然らばそれは何か?……「人は如何に生くべきか。悔無き人生とは何なのか……」—日々不断に自らそれを問いかければ、人各々その答が出てくるでしょう。その答を導き出すのがロータリーの人作りです。

ところが近年のロータリーは、会員増強や財団寄附の数字で会員を激励し、各譽称号の撒き餌を使う様になりました。職業奉仕がロータリーの根幹なら、職業人としての倫理こそ各譽の尺度となるべきものでしょう。然し職業奉仕は目に見えぬ陰徳であり、またロータリーの財政に寄与するものでもありませんから、事業組織化したロータリー本山からすれば無用の長物です。本山の方針がそうなる、末寺の住職たるガバナーも「人作り」などという固苦しい説法をするよりも、専ら信者獲得、寄進勸奨の行脚に精出す様になります。どのガバナー月信にも今や口に苦い良薬は見当らなくなりました。然し時節柄それは致し方ないとしても、自己顕示欲で月信を自己宣伝広報に利用したり、自分の記念寫真集にしたり、というのは困ります。自費でやるなら御自由ですが、多額の公金でなすべきことではありません。特殊な事例とは言え、こんな事態が出現するのは何故でしょうか。

第三 — 金は魔物です。「宝を地に積むな・宝を天に積み」というのがイエスの教えだったはずですが、ローマ・カソリック教会も権威を笠に着て組織を膨張拡大させてくるに従って墮落の途を辿り始めました。過酷な宗教税でも足りず、遂に教会建設の資金集めに免罪符を発行するに到って、ここに宗教改革の火の手が上ります。そうしてプロテスタントという新興宗派が誕生するのですが、先程述べた様に、日本佛教界の墮落も、結局は金という魔物に取り憑かれたからです。金高によって等級をつける戒名料などというのは、



基調講演
(2)

正に免罪符そっくりではありませんか。ロータリー財団寄附者の等級別名誉称号も免罪符的発想でしょう。

たしかに大乘佛教の大衆部思想には俗化の落とし穴があります。然し強烈な個性を持つ傑僧に恵まれた昔の佛教界はその落とし穴を回避してきました。

例えば曹洞宗も大乘の系譜に繋がる宗派ですが、日本の宗祖道元は、弟子の玄明が時の執権北條時頼から寺領寄進を受け、喜び勇んで帰ったところ、警めるところか烈火の如く怒って破門してしまいました。

臨済宗の大燈国師にも「汝等諸人此山中に来て道^{みち}の為^{ため}に頭^{こぶ}を聚^{あつ}む 衣食^{いじき}の為にすること莫^なれ…云々…」という遺誡があります。

片や只管打坐・片や公案提唱という手法の違いはあっても、専ら自己錬成・修行一筋という姿勢です。必ずしもすべてそうだとは言いませんが、今の佛教界の大勢はこういう基本的な人作りを怠^{おろそ}かして金儲けに傾斜^{しんせつ}しておりますし、またこれを本来のあるべき姿に立て直す傑出した指導者も居りません。

ロータリーでも同じことが言えます。毎週の例会が果して人作りの道場になっているでしょうか。話題は殆ど会員増強と財団寄附、そしてお楽しみはゴルフ……問題の根は、当初会員訓練の手段とされていた奉仕プログラムが独り歩きして、結局それ自体が目的化してしまった所にあります。

人間の営みはまことに愚かしく悲しいもので、何事でも目的と手段が顛倒^{てんたう}してしまい勝ちです。続発する企業不祥事も結局手段が目的化して独り歩きした所から発生しました。

ロータリーもこういう世間一般の風潮に毒されて、手段であるべきお金が目的になり、段々金銭感覚が麻痺^{まひ}してゆきます。ロータリーに対する忠誠は、お金という物指によって計られるのです。その結果、ロータリーでもまた、行政府が毎回会計検査院から指摘され

ているのと同じ様な事態が発生し始めました。それは丁度政界・官界・経済界に於ける汚職と同じ構図なのであります。本来ロータリーは、そういう人間社会の汚濁を防ぐ十字軍としての使命を担っていたはずですが、結局「ミイラ取りがミイラになった」という次第です。

何故そうなったのか——要はロータリーの原点とも言うべき「決議23-34」の精神を忘れてしまったからです。「決議23-34」が徽臭い古典で、また今の人達には難解だと言われるなら、私は率直に職業奉仕と言いましょ。職業奉仕こそロータリーの原点なのです。ロータリーは寄附団体ではない、と繰返し口では言いながら、今のロータリーの実体は限り無くライオンズに近付いてゆく寄附団体ではありませんか。問題の根はそこにあります。

ここでもう一度、先程の宗教談義にもどりませんが、人間の道徳心涵養にはやはり宗教を必要とします。特定の宗教を深く信仰するかしないかは別として、人には「我が内なる道徳律」がなければなりません。カントの言う様に、それは正に「天にあって輝く星」なのです。

そして、近世経済史上、職業人の道標たる職業倫理の確立に大きな役割を果たしたのが、プロテスタントと大乘佛教でした。

プロテスタントについては、有名なマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本に詳しく説



かれていますので、今更改めて繰返しません。たゞ、この著述がロータリー創立と機を一にして1905年に完成した、ということあまりにも不思議な天の采配であります。ヴェーバーが慨嘆している様に、その頃成熟を遂げた資本主義は、その発展に寄与した父祖の精神＝原点たるプロテスタンティズムの倫理を忘れ去って、利己的な資本の論理だけが猛威を振う様になったのです。彼はこの時点で、もしこのまゝ事態が進行すれば、この世は「精神の無い専門人、心情の無い享楽人」で支配される様になる、と憂えています。

その時誕生したのがロータリーです——ポール・ハリスは別してヴェーバーと話合いをしたわけではありませんが、これこそ正に、「見えざる神の手」の導きではありませんか。失われたプロテスタンティズムの倫理を、今度は宗教を超えた段階で回復しようとしたのがロータリーだったのです。

ポール・ハリスはその著書・“This Rotarian Age”の中で「ロータリーは宗教でもなければ、宗教に代わるべき何かでもない。それはたゞ古くからある道徳観を現代生活、就中職業生活に於て実践しようとするものなのだ」と言っています。然し初期ロータリアンの精神的基盤＝即ちポールの言う「古くからある道徳観」とは疑も無く「プロテスタンティズムの倫理」であります。それが証拠に、1915年制定の「ロータリー道徳律」には、その結語として「この黄金律の普遍性を信じよう——『すべて人にせられんと思うことは人にも亦その如くせよ』」と聖書の言葉が引用されているではありませんか。これをポールの言葉と合成すれば「ロータリーとは、職業生活に於て、すべて人にせられんと思うことを人にもまたその如く実践することである」となります。これがロータリー創立の精神であり、原点であることは疑を容れません。創立当初の、仲間同志による互惠取引は、そういう感情の素朴な発現であって、

それが昇華されて職業奉仕に到達するわけがあります。

さて一方、大乘佛教ですが、これがヴァイシャーリーに於ける第二結集で長老派と意見が合わず、遂に袂を分かって分派活動を起こした新興部派であることは先程申し述べた通りです。ところで、ヴァイシャーリーと言うのは、ヴァイシャ（商人）の町、という意味です。釋尊は幾度もこの町を訪れて居り、今でも重要な佛蹟の一つに数えられていますが、当時既にヴァイシャーリーは、東方インドの新興通商交易都市として榮え、巨億の富を誇る大商人がこの町に大勢居ました。釋尊在世中もそうですが、佛教教団は貴族・商人階級による財政支援によって成立していた都市型宗教なのです。従って大乘思想がヴァイシャーリーに於て芽生え、それが東西の通商交易路、シルクロードを通して中国・朝鮮に伝わり、更に終着点日本に到って、近世日本の商業資本興隆期に、大商人達の心の拠り所になった、ということも、決して偶然の巡り合わせではありません。またロータリーが、新興大都市シカゴで倫理を重んずる中小企業主達によって結成され、尔来あらゆる階層の職業人に事業遂行の道標を示してきたことも見事に符節が合っています。キリスト教はその出自からして元来農村型宗教だった為に、都市文明に対しては無力になり、資本の論理に抗し切れなくなったのでしょう。そこで、それに代るものとして構築された精神的結社がロータリーである、と敢えて私は言いたいのです。牽強附会と一蹴されるでしょうか？

佛教思想が日本で実業人達の倫理規範として定着するのは江戸時代であります。それは徳川幕府が取った宗教政策、治安対策としての檀家制度や、また教育普及の為の寺小屋制度とも大きな関係があります。ともあれ、それが古代からある日本人の祖靈信仰とも結びついて、勤勉・質素・正直・報恩という実

基調講演 (2)

業人の倫理訓になったのです。

また、そういう職業倫理が育つ背景として、指導的立場にあった僧侶、有識者の力も見逃せません。大衆と共に進むという大乘思想は、日本に来て愈々鮮明になり、信仰の実践は寺院内だけの問題ではない、在家の信者が、日々額に汗して働く勤勞—それも立派な佛道修行の道だ、と教えたのであります。そして、民衆に自ら範を示す為に一・（一日作さざれば一日食らわず）一で、出家者自身も作務を修業の要諦としました。これは大乘佛教の偉大なる功績であります。文字通り「大きな乗物」だったのです。

これは、プロテスタントが、自分の職業を眞面目に遂行すること、それが取りも直さず隣人愛の実践であり、神に仕える道である、としたのと全く軌を一にしています。

職業奉仕の話になると、よく皆さんが、「そんなことなら昔から日本にあるよ」、と言って老舗の家訓など引用されますが、これだけでも大乘佛教の思想が、如何に日本の職業倫理として浸透しているか分るでしょう。早い話が、連綿伝えられてきた近江商人の心得一・（賣手よし 買手よし 世間よし）一など正に「決議23-34」の冒頭にあるロータリー哲学そのものではありませんか。

職業倫理として日本にはこういう伝統的の地があったればこそ、曾て規定審議会で「決議23-34」が廃止されそうになった時、全日本の代議員が結束して反対運動をし、この名決議の存続に成功したのであります。

米山さんが日本にロータリーを導入しようとしたのも、やはり職業奉仕という思想に感銘を深くしたからであり、戦時中、軍の圧力によって表面上は解散しても、なお密かに会合を続けたその執念も、思えば日本人の血の中に江戸時代商人の実業観が流れていたからだと思われれます。

さて、R・I復帰後、経済復興の波に乗って日本のロータリーは更に爆発的な拡大増強

を遂げましたが、ロータリーの志は果たして何処へ行ったのでしょうか。成熟した資本主義の末路を見たヴェーバーが一・（啓蒙主義の薔薇色の雰囲気さえ今日では全く失せ果て、職業義務の思想は、かつての宗教的信仰の燃えかすとなって、我々の生活の中をうろつき回っている）一と嘆いた様に、「職業奉仕の思想はロータリー精神の燃えかすとなって我々ロータリアンの中をうろつき回っている」のではないのでしょうか。



▲お疲れさまでした